

(6) ニガウリ
ア 殺菌剤

農薬名	成分名	系統名	FRACコード	適用病害虫名										注意事項		
				うどんこ病	炭疽病	つる枯病	斑点病	べと病								
アフェットフロアブル	ペンチピラト	アミド	7	◎												
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	ストロビリン	11	◎	◎				◎							うどんこ病では薬効の低下が認められる。
アミスターオプティフロアブル	アゾキシストロビン・TPN	混合剤	11・M05	◎												
アーリーセーフ サンクリスタル乳剤	脂肪酸グリセリド	天然物由来		野												野：【野菜類登録】注1)
イオウフロアブル	硫黄	無機殺菌	M02	野												野：【野菜類登録】
カリグリーン	炭酸水素カルウム	無機殺菌	NC	野												野：【野菜類登録】
サンヨール	DBEDC	有機銅	M01	◎												
ジーファイン水和剤	炭酸水素ナトリウム・無水硫酸銅	混合剤	NC・M01	野												野：【野菜類登録】 幼苗期、高温時、極端な低温及び湿潤状態が続く場合の散布は 葉害の恐れがあるので避ける。過度の連用も避ける。
ストロビーフロアブル	クレソキシメチル	ストロビリン	11	◎					◎							うどんこ病では感受性の低下が認められる。
ダコニール1000	TPN	その他	M05	◎	◎	◎	◎	◎								
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	ベンゾイミダゾール	1		◎		◎									
トリフミン水和剤	トリフルミゾール	SBI	3	◎												
パンチョTF顆粒水和剤	シフルフェナミド・トリフルミゾール	混合剤	U06・3	◎												
パレード20フロアブル	ピラジフルミド	その他	7	◎												
ベルコートフロアブル	イミダジンアルヘンシル酸塩	その他	M07	◎												
ボトキラー水和剤	バチルススプーチス	生物農薬	BM02	野												野：【野菜類登録】
モレスタン水和剤	キノキサリン系	その他	M10	◎												

注1) ストロビリン系薬剤およびTPN剤とその混合剤との混用および近接散布を避ける。ストロビリン系薬剤を含む農薬を散布した後に本剤を使用する際は2週間以上間隔をあける。アセチミダゾール剤、トリフルミゾール剤、ベノミル剤、キャブタン剤と混用しない。

(6) ニガウリ
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	成 分 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項	
			ケ ラ	ネ キ リ ム シ 類	ハ リ ガ ネ ム シ 類	セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	疫 病	白 絹 病	つ る 割 病	苗 立 枯 病		
ガ ス タ ー ド 微 粒 剤 バ ス ア ミ ド 微 粒 剤	ダゾメット	I:8F						◎			◎			
ク ロ ー ル ピ ク リ ン	カルビ°クリン	I:8B	◎	◎	◎	◎			◎	◎	◎			
ク ロ ル ピ ク リ ン 錠 剤	カルビ°クリン	I:8B				◎			◎	◎	◎			
ク ロ ピ ク 8 0 ド ジ ョ ウ ピ ク リ ン ド ロ ク ロ ー ル	カルビ°クリン	I:8B		◎	◎	◎			◎	◎	◎	◎		
ソ イ リ ー ン	カルビ°クリン・D-D	I:8B・8A					◎	◎						高温時でも薬害事例があるので、ガス抜きを十分行う。
ダ ブ ル ス ト ッ パ ー	カルビ°クリン・D-D	I:8B・8A					◎	◎			◎			
テ C 油 剤 D D	D-D	I:8A					◎	◎						

オ 病害虫防除法（ニガウリ）

（ア）うどんこ病 *Oidium* sp.

（防除のねらい）

施設栽培での発生が多く、高温多湿で光線不足の場合に発生しやすい。葉裏から発生しはじめるので葉の裏をよくみて、初発時から薬剤散布する。

（耕種的防除法）

- （1）老化葉、病葉は除去し、施設内の透光、通風をよくする。
- （2）窒素質肥料の多用を避ける。

（イ）炭疽病 *Colletotrichum orbiculare*

（防除のねらい）

6～7月の梅雨期、秋季に降雨が多いと発生が多く、葉および果実に多発する傾向にある。病原菌は雨水の飛沫とともにまん延する。発生してからの防除は手遅れとなるので耕種的防除に努める。

（耕種的防除法）

- （1）排水をよくする。
- （2）被害果は早期に除去する。
- （3）敷わらやマルチを行い病原菌のはね上りを防ぐ。
- （4）発生地での連作は避ける。

（ウ）つる枯病 *Didymella bryoniae*(Auerswald) Rehm

（防除のねらい）

種子伝染による発生が多いので注意する。果実のなり疲れで、樹勢の衰弱した時に病勢が進展するので、収穫が多くなった時期の肥培管理に注意する。地際が多湿になると茎の地際部での発生が多くなる。

（耕種的防除法）

- （1）無病苗を植える。
- （2）高畦にし、株元付近の排水をよくする。
- （3）着果が多くなったときは摘果を行い、着果負担を軽減させる。
- （4）収穫後病株は除去後焼却する。

（エ）斑点病 *Cercospora citrullina*

（防除のねらい）

主として葉に発生し、はじめに周辺不明のような淡黄色の小斑点ができ、次第に褐色に変わり円形か多角形の病斑となる。露地栽培に発生が多く、特に多雨時に発生する。

（耕種的防除法）

- （1）適正な肥培管理を行う。
- （2）ハウス内では多湿にならないように換気に努める。

（オ）べと病 *Pseudoperonospora cubensis*

（防除のねらい）

葉脈に区切られた多角形の病斑を呈し、多湿時には病斑の裏にすす状のかびを生じる。肥料切れや草勢の衰える頃に降雨が多く、多湿条件下になると発病する。特に梅雨期になると発生が著しい。多湿状態にならないよう環境改善を図る。

（耕種的防除法）

- （1）肥料切れしないように管理する。
- （2）ハウス栽培では多湿にならないように換気に努める。

(カ) フザリウム立枯病 *Fusarium oxysporum, cucurbitae race1*

(防除のねらい)

病原菌は土壤中に生存して土壌伝染を行う。また、果実が地面に接した部分から菌が侵入して腐敗をおこし、種子伝染の原因となる。

(耕種的防除法)

- (1) 健全株から採種する。
- (2) 発生地ではウリ科作物以外の作物との輪作を行う。
- (3) 抵抗性台木を用いる。

(キ) ウイルス病 WMV-2, PRSV-W, モザイク病 ZYMV

(防除のねらい)

ウイルス病はカボチャモザイクウイルス (WMV-2) , パパイア輪点ウイルス (PRSV-W) の、モザイク病はズッキーニ黄斑モザイクウイルス (ZYMV) の感染によって引き起こされ、主にアブラムシによって伝搬される。生育初期に感染すると、生育不良となるので、育苗期から周辺の伝染源になるウリ科植物等の除去に努めると共にアブラムシの飛来防止策を行う。

(耕種的防除法)

- (1) 病株は速やかに除去し、生育初期の本ぼでは植えかえる。
- (2) 病株に触れた手やハサミなどで芽かきや整枝はしない。罹病株は別に管理する。万一触れた場合は手をよく洗い、ハサミは第3燐酸ソーダ10%液で消毒後管理作業を行う。
- (3) アブラムシの飛来防止のため、寒冷紗を被覆して育苗する。また、露地栽培ではシルバーマルチ、シルバーストライプマルチ、シルバーテープ等を利用する。

(ク) アザミウマ類

(防除のねらい)

(耕種的防除法) } ミナミキイロアザミウマの項参照

(ケ) ミナミキイロアザミウマ

(防除のねらい)

県本土では、露地での越冬はかなり難しい。施設栽培では野外で発生した成虫が育苗～生育初期に侵入する。施設内での発生は冬季は少ないが、春先気温の上昇に伴って急増し、それが野外に飛び出し、露地栽培での発生源になっている。したがって、育苗～生育初期の徹底防除と栽培終了時の野外飛び出し防止対策が重要である。

(耕種的防除法)

- (1) 防虫ネット (シルバー) 被覆で育苗する。ハウスの換気扇部は、防虫ネットで侵入防止を図る。
- (2) 施設本ぼの近紫外線カットフィルム利用は有効である。
- (3) 全面マルチ (シルバー、ミラー、ミラネスク) も有効である。
- (4) ハウス栽培終了後は蒸し込みをする。

(コ) カメムシ類

(防除のねらい)

奄美以南で発生するアシビロヘリカメムシが主な加害種で、本土での被害はほとんどない。発生源はオキナワスズメウリ等の野生寄主で、徳之島では梅雨が明け野生寄主が枯れる6月中旬から増え、以降10月頃までだらだらと発生する。成虫、幼虫ともに幼果時から果実を吸汁加害し、被害果は吸汁痕の部分が硬化し、肥大が止まったり、曲がり果の原因となる。加害が激しいと黄化し食用に適さなくなる。成虫の飛来を認めたら早期に防除を行う。

(耕種的防除法)

発生源となるオキナワスズメウリ等の野生寄主を除去する。飛来虫は捕殺する。

(サ) コナジラミ類

(防除のねらい)

被害は作物によって異なり、ニガウリでは主に吸汁害とすす病の発生による果実の汚れが問題となる。多発すると防除が困難なので、発生初期から防除する。

(シ) アブラムシ類・ワタアブラムシ

(防除のねらい)

発生の主体はワタアブラムシでキュウリモザイクウイルス、カボチャモザイクウイルスを媒介するとともに、直接的な吸汁被害の大きい重要害虫である。ハウス、トンネル栽培では一度侵入すると高温乾燥により急激に増殖するので、防除は苗床及び本ぼでの侵入定着防止に重点を置く。露地栽培では有翅虫の飛来防止にねらいをおき、生育初期から防除する。また、周辺の野生寄主植物からの飛来を少なくするために、除草など環境整備に努める。物理的防除と薬剤散布を併用するのがよい。

(耕種的防除法)

- (1) 苗床や施設栽培のサイドは防虫ネットで覆い、有翅虫の侵入を防止する。
- (2) 露地栽培ではシルバーマルチ、シルバーテープにより、有翅虫の飛来定着を防ぐ。

(ス) ウリノメイガ (ワタヘリクロノメイガ)

(防除のねらい)

夏から秋にかけて発生が多く、ハウス内にも侵入する。老齢幼虫は葉をまいて食害し、花びらや幼果を食べることもある。早期発見、早期防除に努める。

(セ) オオタバコガ

(防除のねらい)

多発年には大きな被害がでる。葉だけでなく、果実の表皮を食害して品質の低下をきたす。老齢幼虫になると防除が困難となるため、早期発見に努め若齢期に防除する。

(ソ) ヨトウムシ類、ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

若齢幼虫は、表皮を残して葉肉部を食害するため、葉は始め不整形の白斑を生じ、やがてかすり状となる。早期発見に努め若齢幼虫期に防除する。

(耕種的防除法)

卵塊やふ化直後の集合加害している幼虫を分散前につみ取る。

(タ) マメハモグリバエ

(防除のねらい)

寄主範囲が広く、野菜類のほか、花き類、雑草に寄生する。ニガウリでは幼虫が葉の表皮下に潜り込み食害するため、多発すると生育抑制、早期枯れ上がりを生じ、収量が減収する。薬剤に対する感受性は低く、多発すると防除が困難になるので、早期防除に努める。生態などについてはキクの項参照。

(耕種的防除法)

- (1) 発生源となる周辺の雑草、収穫後の被害残渣は除去する。
- (2) 施設の換気部、出入口には寒冷紗を設置し、成虫の侵入防止を図る。
- (3) 施設では黄色粘着リボンを吊り下げ成虫を誘殺する。
- (4) 発生地から苗を導入しない。
- (5) 被害葉は摘み取り適切に処分する。

(チ) ハダニ類

(防除のねらい)

世代経過が短いため世代のくりかえしが多く、同一薬剤を連用すると抵抗性が生じやすいので、有効成分の異なる薬剤のローテーションを組む。多発すると防除が困難となるので早期発見、早期防除に努める。

(ツ) センチュウ類

(防除のねらい)

(耕種的防除法)

}] キュウリのネコブセンチュウの項参照